

2021年4月26日

茨城県知事 大井川 和彦 様

県産業廃棄物最終処分場建設に反対する連絡会

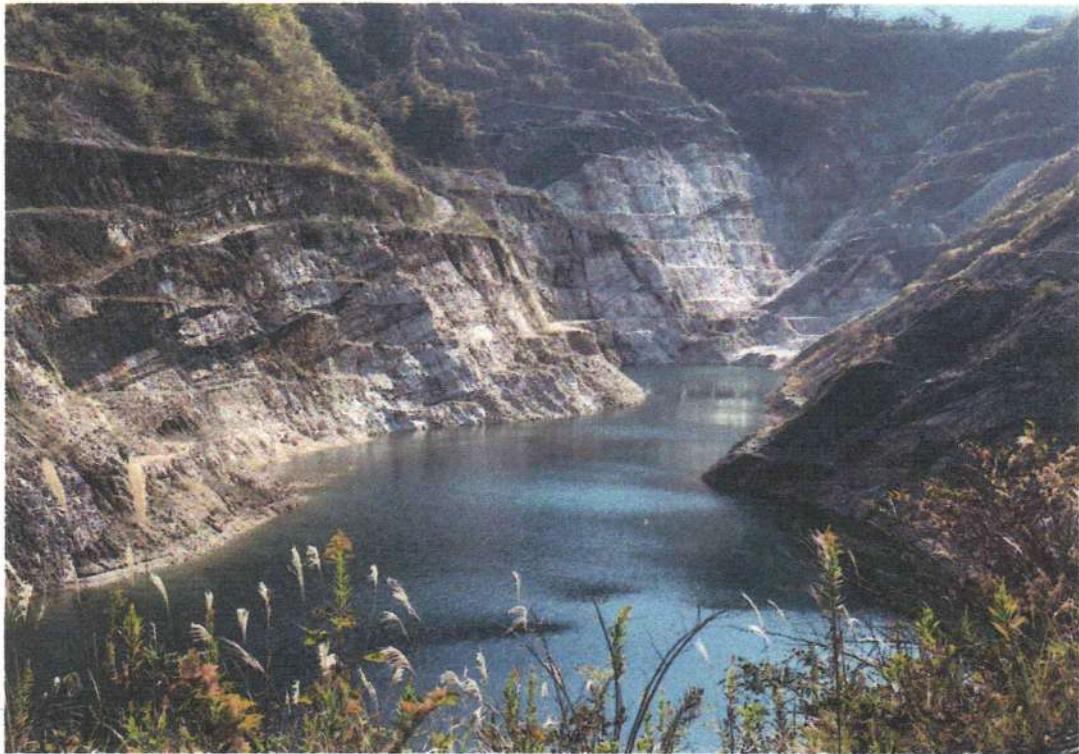
代表 荒川 照明 電話 090-9845-7019

日立市台原町 2-10-10

新産業廃棄物最終処分場整備に向けた課題への対応策（令和3年2月）に

関する異議申し立て（2021年3月15日付け提出済み）に追加添付する資料

追加添付資料：唐津沢の谷間に廃棄物処分場の建設が不可能なことを説明する資料



唐津沢の現風景

## 唐津沢の谷間に廃棄物処分場の建設が不可能なことを説明する資料

広大な沢の谷間に廃棄物処分場を建設することの危険性はこれまでにもいろいろと述べられて来てはいるが、この度の県の計画では全く隠蔽されている。したがって、できるだけ具体的に指摘して置かなければ今後とも見過ごされてしまうと危惧される。

県の説明では、エコフロンティアかさまの例を示すだけで、唐津沢に建設する場合については、「日立市の承諾の回答を取り付けてから基本計画を始める」と言って具体的なものは何一つ示されていない。そこで、エコフロンティアかさまの例を見ながら、唐津沢の谷間に建設する場合には、集中豪雨時の水害に関する条件が根本的に異なることを説明したい。

### 1. エコフロンティアかさまの場合の特徴

まず初めに、エコフロンティアかさまの場合の全体配置図（図1）と埋立造成計画縦断面図（図2）を示す。台地状のところの採石場跡地の広大な窪地が利用された。地下水位面まで埋立をして皿状の基盤を埋立造成してから、粘土とプラスチックシートで内張をして廃棄物貯蔵槽が設置された。全国事例では、埋立高さは15m程度であるが、廃棄物槽は採石場跡地のため深くなっている。窪地全体を埋め立ててはいるが、土留め工事は全くしていないのは大きな特徴である。廃棄物槽の周囲に連なる小高い峰の高さの変化に応じて、廃棄物槽の縁は傾斜している。

その次の図3は、地下水に対する影響検討と防止対策のものである。ピンクで示されるように、廃棄物貯蔵槽の側面には窪地の斜面を活用しており、ごく一部だけに低い堤防を設けている。緑色で示すように、鉛直遮水を設けて側壁部の土壤の補強と地下水の防止策がなされている。廃棄物槽は台地状のところに設置されたので、豪雨時に周辺から廃棄物槽に流入する雨水は極めて少なく、廃棄物槽以外の敷地内の降水量を受ける貯蓄池は小さくて済む。

### 2. 唐津沢の状況

これまでに唐津沢の整備計画の具体的なものは全く開示されてないので、唐津沢降水区域の図面（図4）をもとに、廃棄物処理施設の配置計画を試み、集中豪雨時に想定される災害の状況を考察する。唐津沢は広大で降水域の面積は1.25km<sup>2</sup>あり、沢には通常時にも河川の表面流があり、集中豪雨時には沢出口付近の比較的に低い部分（標高220m以下の区域で、図中にグレーで表示された区域）に多量の雨水が流れ込む。その低い区域は深い窪地になっており、底地には大きな湖が形成されている。湖の水面は、地下水の水位面と考えられる。

沢出口付近の比較的に低い部分（標高220m以下の区域）の面積は、約30haで県が計画している総敷地面積にほぼ等しい。すなわち、総敷地面積の約4.1倍もの広い唐津沢全体の降水が流入するので、集中豪雨時の洪水対策は非常に厳しいものになる。

航空写真を見ると、唐津沢の上流部には明らかな土砂崩れの個所が点在しており、広大な沢上流部の管理・保全の問題が密接に関連しているので、集中豪雨時の洪水対策に関しては、唐津沢全域が一体で不可分のものである。このところ長年に渡って森林の管理・保全が放棄されて荒廃しているので、唐津沢上流部の土石崩壊の危険性も増大しているはずである。県は唐津沢全体の集中豪雨時の災害対策の責任をどこまで果たす覚悟・権限があるのか明確

にしてから廃棄物処分場の計画を進めていただきたい。

近年は地球温暖化の影響で集中豪雨時に未曾有の水害が多発しており、平成27年の水防法の改正により、地域ごとの想定最大降雨量が決められて全国で洪水による災害対策が更新されていることに最近になって気付いた。したがって、当初はカスリーン台風時の36時間の降雨量245.6mmに基づき洪水対策を考察したが、関東地区の48時間想定最大降雨量の規定値925mmに基づき洪水時の災害対策を考察することに変更した。当初考えた最大降雨量の3.7倍の最大降雨量に基づく洪水対策は極めて厳しいことになる。唐津沢の総降水量の面積は1.25km<sup>2</sup>なので、降水量は115万m<sup>3</sup>になり、その半分が沢の低地に流れ込むと仮定すると、その容積は57万m<sup>3</sup>にもなる。現状ならば、未曾有の集中豪雨時でも沢の底地の大きな湖が防災ダムの役割を充分に果たすことになる。

### 3. 唐津沢の谷間に廃棄物処分場の建設が不可能なことの説明

廃棄物埋立容量：243万m<sup>3</sup>（240mx350mx29m高さ）、48時間降雨量：925mmに対応する容積：57万m<sup>3</sup>（170mx120mx20m深さ）の防災調整池、浸水処理施設、管理棟、駐車場、新設搬入道路などの配置を試みた一例を図5に示す。広大で特異な皿形の廃棄物地貯蓄槽を谷間に配置するのには、自由度があまりない。廃棄物槽のための広大な敷地を確保するには、高さ50m、長さ200mに及ぶ大規模な土留め工事、廃棄物埋立容量243万m<sup>3</sup>以上と推定される多量の埋立工事を要する。埋立地だと地震時の液状化の災害も心配である。

埋立工事期間中には、10屯積トラック24万台が諫訪梅林道路を往復することになるが、このような情報はこれまで伏せられている。後になって「実は埋立期間中、土を積んだトラック24万台通します」では、日立市民に対する明らかな背信行為と言わざるを得ない。

図6のように廃棄物処分場の施設は全て谷底に配置されるので、谷の斜面に沿って流入する雨水を避けるための堤防を周囲に築いたとしても、すべての雨水を防災調整池に導入することは不可能であり、集中豪雨時には、ほとんどの雨水は、廃棄物処分場の施設を越水して、防災調整池に流入することになる。流木などで流路が塞がれれば、直接に鮎川へ流れ込むことになる。洪水の深さや流れの速さなども詳しく考察したいが、これまでの経緯だけからも洪水時の災害対策は現実的に不可能であると言える。

なお、唐津沢は別の沢と合流して大平田地区に繋がっているので、この地区的近年の洪水時の災害対策にとっては、広大な唐津沢を埋め立てて廃棄物処分場を建設することは大きな障害になる。これらの要因も考慮すると集中豪雨時の水害に関わる条件は更に悪くなる。

（2021.4.18 文責：鈴木鐸士）

### 添付図面

図1：エコフロンティアかさまの全体配置図

図2：エコフロンティアかさまの埋立造成計画縦断面図

図3：エコフロンティアかさまの地下水に対する影響検討と防止対策

図4：唐津沢降水区域の図面

図5：唐津沢の谷間に廃棄物処分場の建設が不可能なことを証する図面

図6：唐津沢に廃棄物処分場の施設を配置する場合の一例

公共処分場 生...

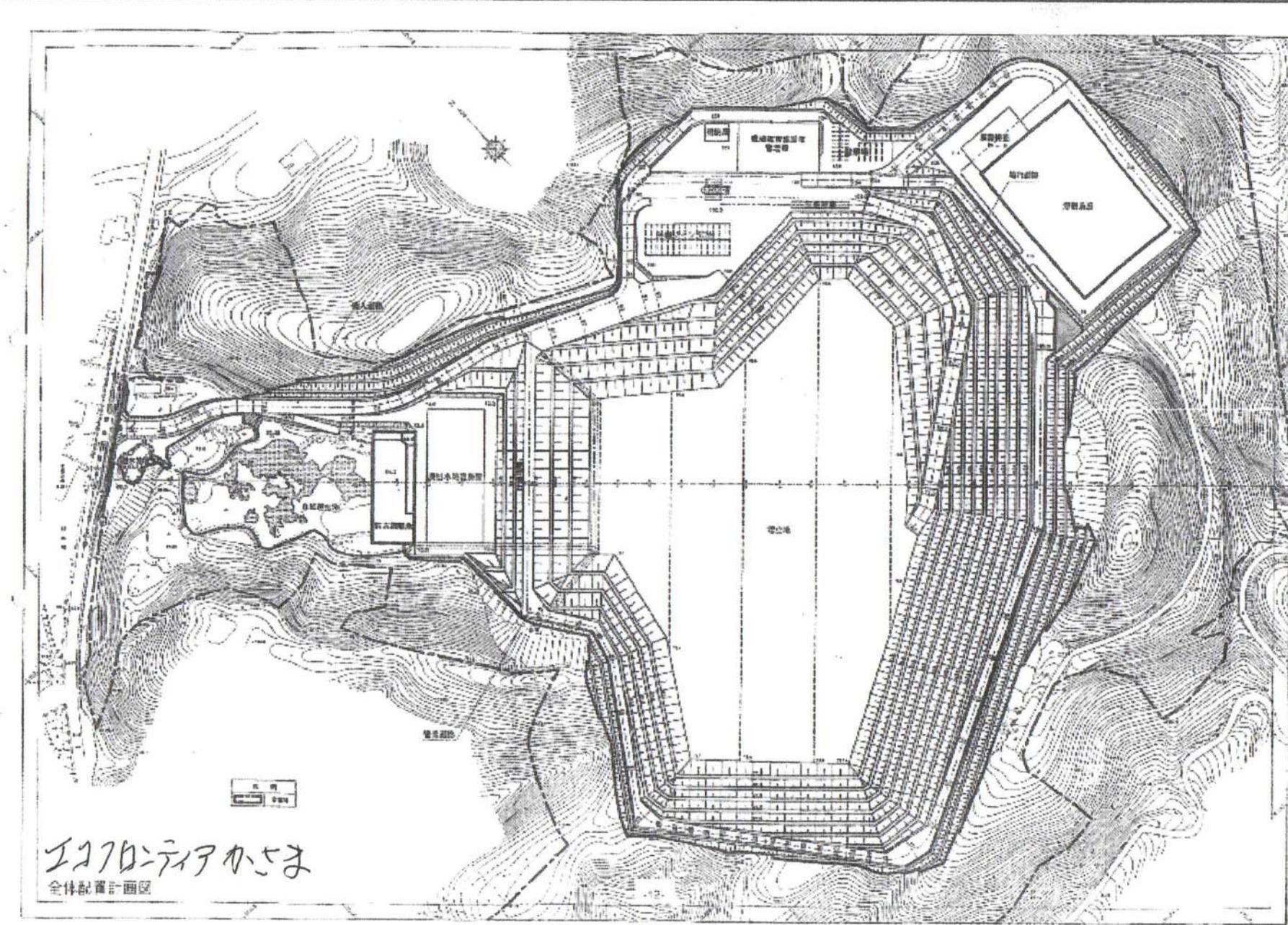


図 1

エコロジアなみ

埋立造成計画縦断面図 S=1 : 1000

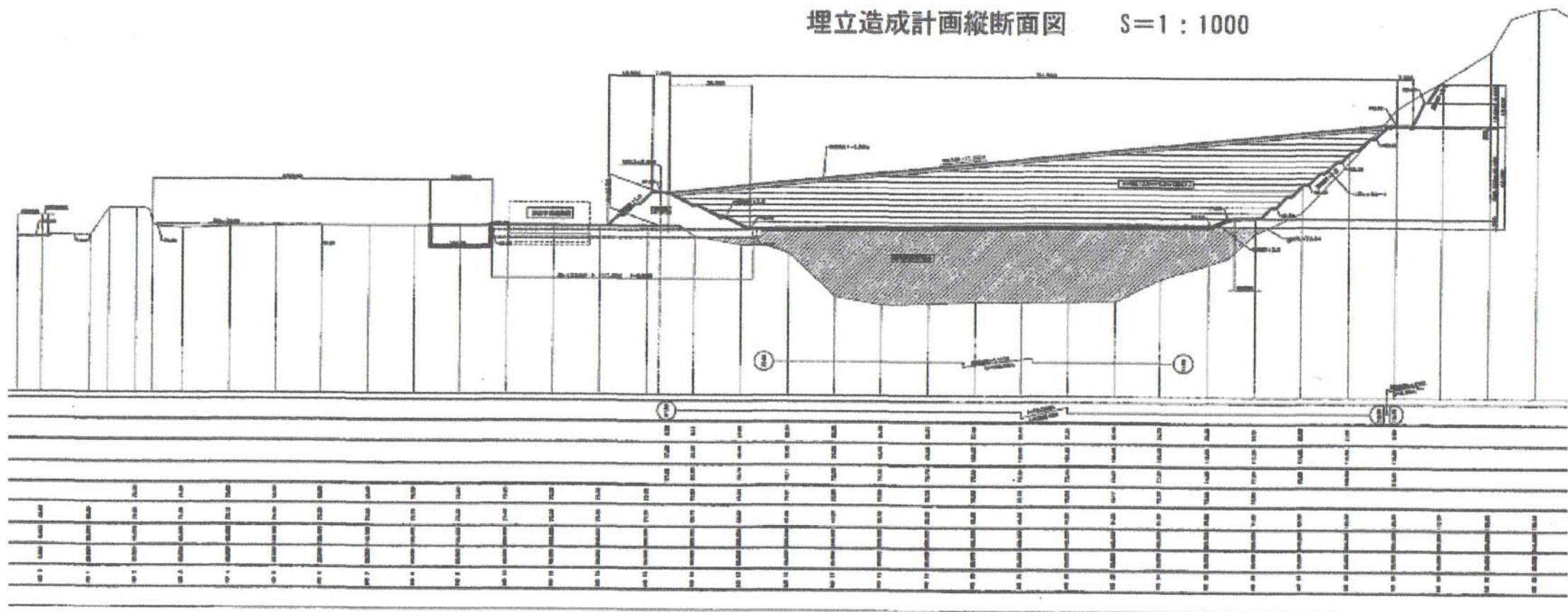


図 2

# 「エコフロンティアカミ」 地下水に対する影響緩和と防止対策

月.pdf - Adobe Acrobat Reader DC (32-bit)

ヘルプ(H)

X

## 地下水に対する影響検討と防止対策

現行の灌漑実績から、渓流水下水系への影響及び健全対策について考察する。

川・地下水影響はなし。

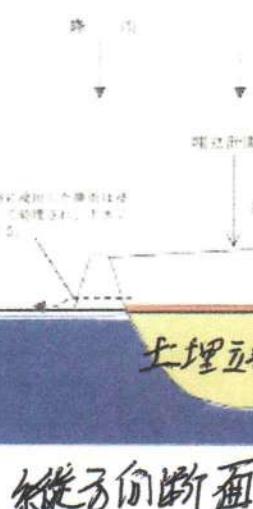
固形物の影響（図3-1左基礎）

現在開として存在する施設（河川・排水渠）を行い表面流水を施す予定である。

該分場に開設された施設は、溢出水として地盤表面下水に改流する可能性はない。

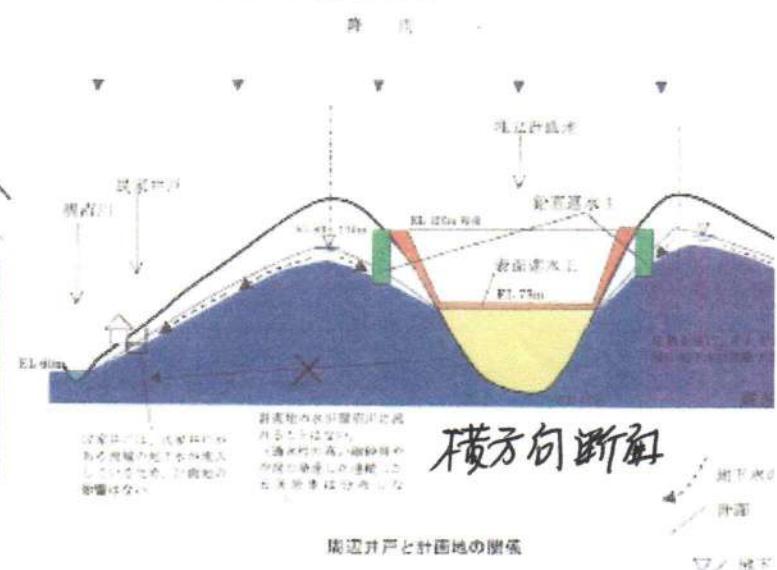
## 井戸利用への影響

- 井戸水は、採石場周辺の岩盤から外傾へ向かって流れれる浅層地下水流取している。
- 地下水の流れは、尾根を縦に分かれため、埋立地内の地下水と井戸水の循環域の浅層地下水とは、基礎地盤において、直接水性が水土保持壁や石灰岩に由来する充填等は確認されなかったことから、どちらの地下水流出はない。
- 埋立地換溝上計画地周辺を走る深根部については、表面流水工に加え遮透水性岩盤まで鉛直通りたため、採石段と明記の地下水は遮断される。



縦方向断面

調査川と計画地の関係

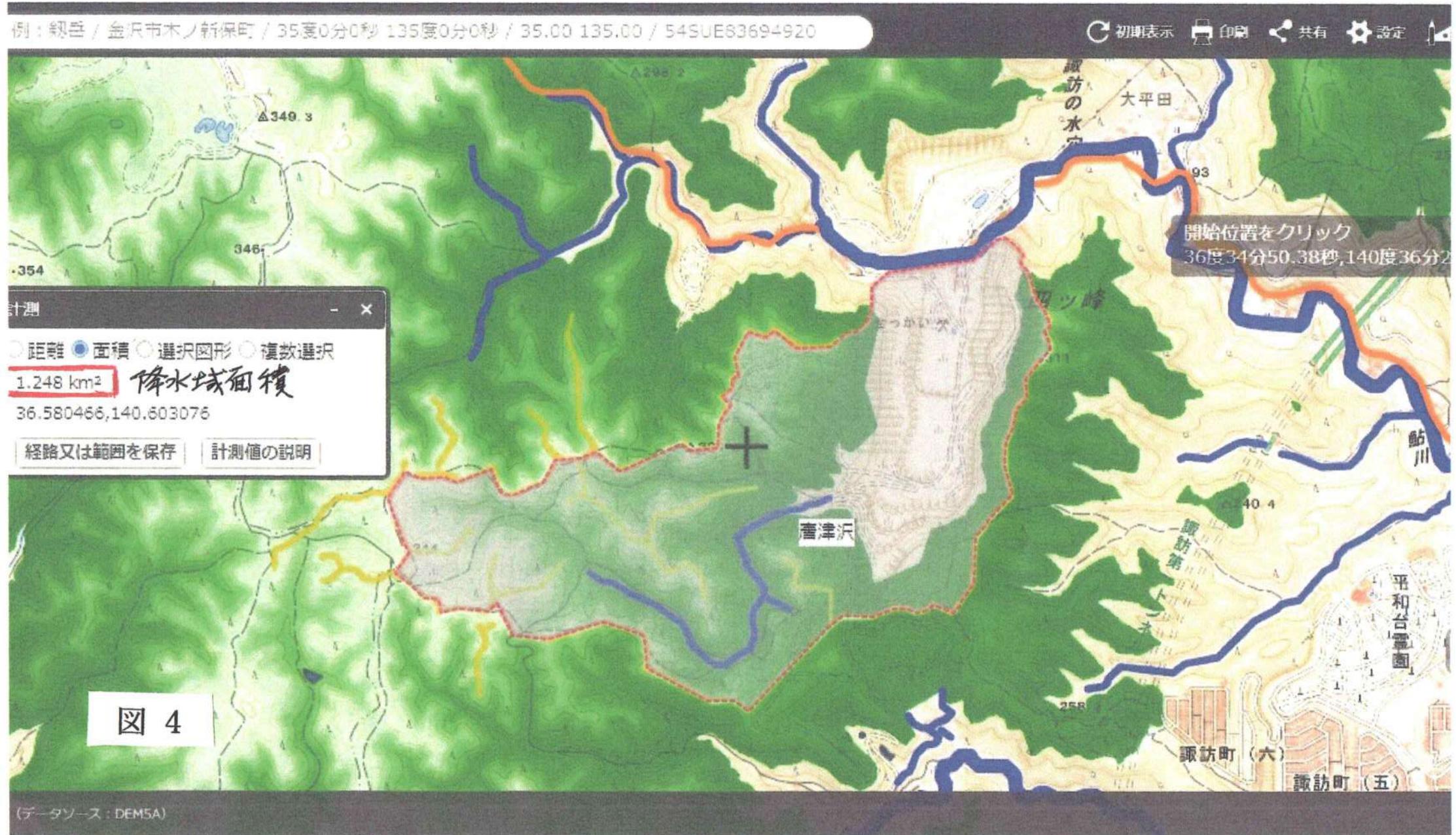


周辺井戸と計画地の関係

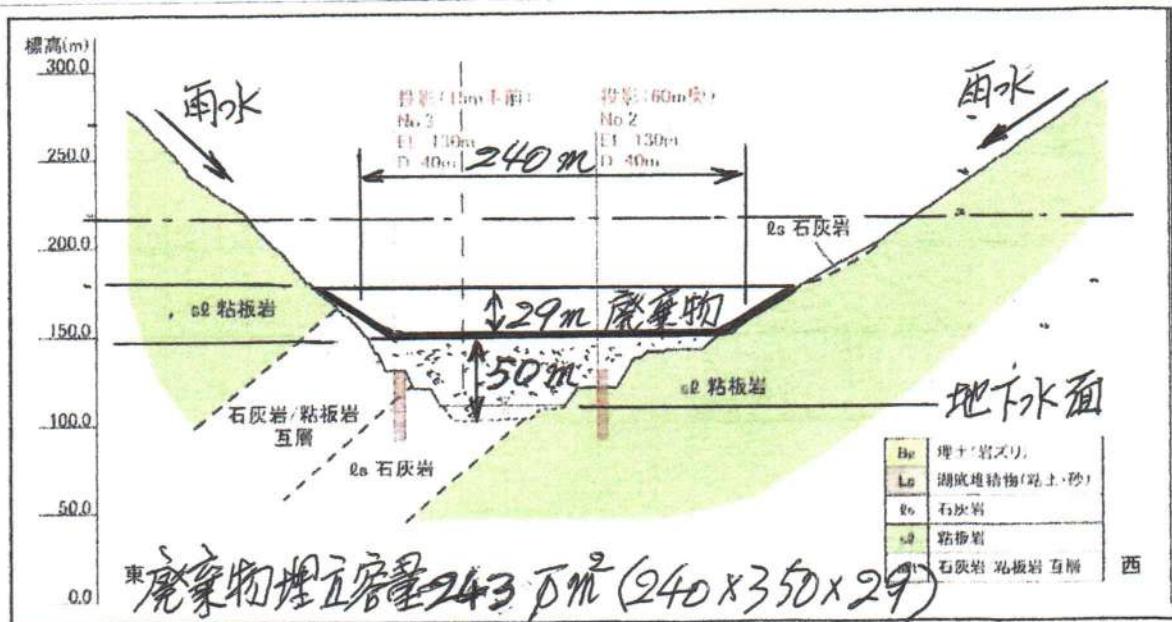
## 健全対策

- 生産地は、表層から10m、底盤はシルシル層が構成となり、以下は遮透水性を有す。地下水は、石場跡地に集まる純下水であり、計画地内から岩盤を越えて貯留の確度、流出する。純下水の形状から非透達に蓄積された濁流、純下水は、計画地内に蓄積されることとなるが開いた場合にあらためて遮透水性が一時的でなく持続する。計画は表立基工に遮透水性があり、ダムや砂利堆積は遮透水性の蓄積を難しくとする。部分的な堆積地においては遮透水性を示すことから遮水性を考慮して改修範囲とする。範囲、探査の注意にて、では地下水位、透水性の詳細調査をもとに決定することとする。
- また、若堆積基盤地において施設前のあるみ創立基本性向工のため、基礎カウンターフラッジングみどり・メタルバー・アスファルト表面にセメントドグランジを施工する。基礎地盤は直下よりは遮透水性を示すことから、ダム基礎クリヤリングに準じ、砂利層程度、深度10m程度を標準とする。計画にはリーザー・グラウンド・プロファイル詳細調査をもとに決定することとする。

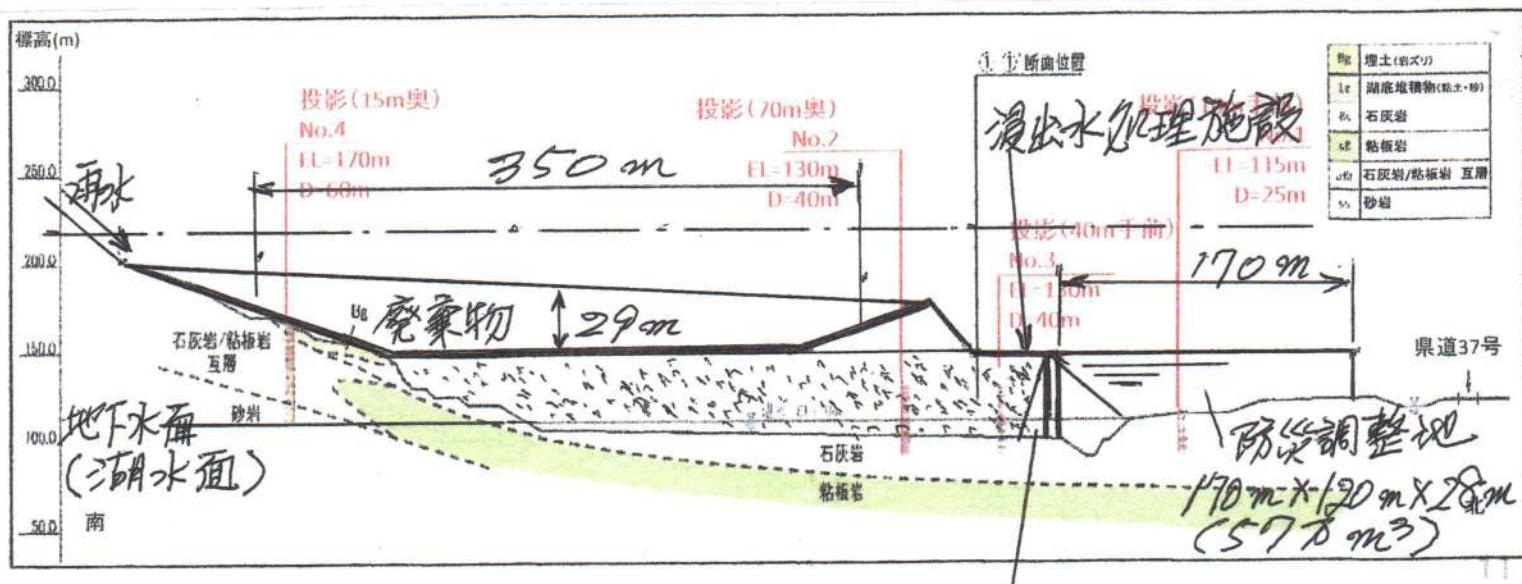
図 3



唐津沢降水面積図 グレー部分：標高220m区域 おおよそ30ha



(a) 横方向断面図



(b) 縦方向断面図

唐津沢の谷間に廃棄物処分場の建設が不可能なことを証する説明図

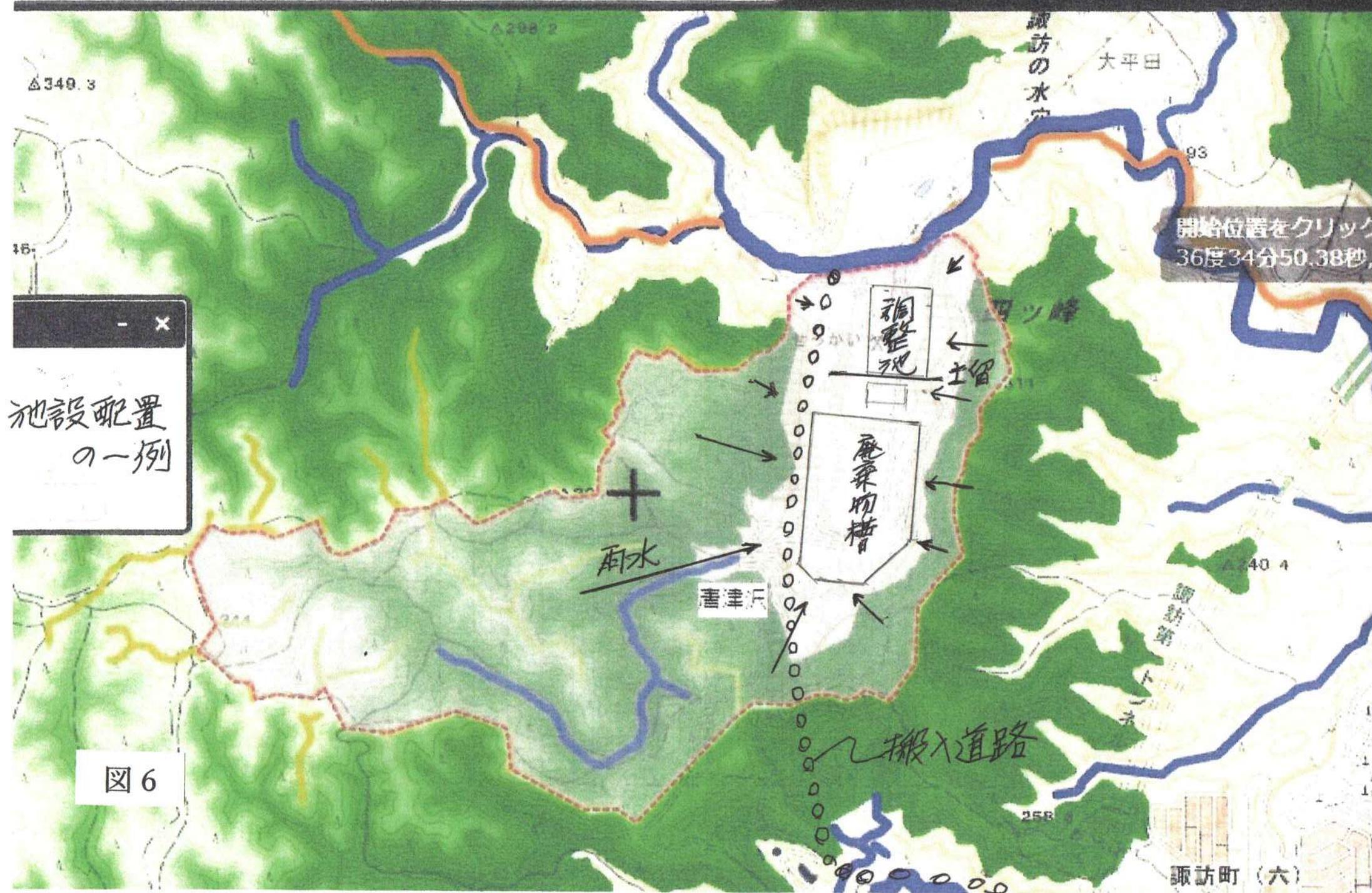
(雨水は廃棄物槽に流入してしまい、防災調整池に導入するのは不可能)

廃棄物埋立容量 : 243 万 m<sup>3</sup> (240mx350mx29m 深さ)

流域面積 : 1.25 k m<sup>2</sup> 48 時間降雨量 : 925 m m

防災調整池容積 : 57 万 m<sup>3</sup> (170mx120mx28m 深さ)

図 5





付録：唐津沢案内図

唐津沢降水域面積  
1.248平方キロメートル  
(124.8ヘクタール)

湖面面積  
7.3ヘクタール

- 分水嶺
- 河川
- 市境線
- 標高290m ~
- 標高220m ~ 290m
- 標高 ~ 220m
- 唐津沢降水域

0m 500m 1000m

作成 鈴木 智子

